

## 九章 夏の一時帰国

2002年6月末、子どもたちの学校が終わり、例年通り日本に2カ月ほど一時帰国することになった。航空券を見ると、マドカの名前がMadakoつまりマダコになっている。

わたしは蛸（タコ）ではないっ。

慣れない外国名前がまちがわれるのは日本だって同じだが、テロ以後、空港では名前が1字でも違えば別人として処理され、搭乗が拒否される。つくりなおしてもらった。

帰国の前の日、わたしは夫とふたりで市の中央警察に行った。没収されていた夫の日本国内用の運転免許証を「取り返す」ためである。

取り上げられたのは2週間前。

日本の梅雨並に蒸し暑い夕暮れで、わたしは晩ご飯のしたくをしていた。トマトのスパゲッティと、スカロッピーナという豚肉料理用のために、にんにくを大量に薄切りにする。イタリア料理のコツのひとつはにんにくで、スパゲッティ用なら1人につき1片ほどの量を、極上のオリーブ油で5分ほど焦がさないよう煮る。これのにんにく臭さがとれ、なんとも言えない風味だけが残る。オリーブ油も、最初はケチって安いのを買っていたら、どこがあの騒いでるオリーブ油なんだろう、と首をひねるほど菜種油と変わらなかった。が、高いのを試しに買ってみると、う、うまい。たまげた。ものすごいコクがある。で、わたしは一番安いヤシ油と高いオリーブ油の2種類を買って、ここぞ、というときにだけ高いオリーブ油を惜しまず使う。

スカロッピーナは、レストランで食べてうまかったので料理法を聞いて以来、家でもよくつくる、簡単でうまい豚肉料理である。豚肉の味がしっかり感じられるわりに、さっぱりしている。豚カツ用の肩ロースを、豚カツの半分の薄さと大きさに切り、塩胡椒（こしょう）して中火でにんにく風味の油で焼き、火が通ったら4人分で1個分くらいのレモン汁をかけ、水どき片栗粉でとろみを

つけて、おしまい。イタリアだとアミド・ディ・マイズ、つまりトウモロコシでんぷんを使うが、これは日本の片栗粉とほとんど同じである。片栗粉と言っても今どき原料は片栗ではなくじゃが芋だが。

うまいイタリア料理には、絶対ここは手を抜いてはだめ、というポイントがいくつかある。イタリア人は必ずそこに手間と暇をかけ、「便利」な「まずさ」を却下する。6人前の「うん」という料理をつくるには、2時間くらいよかつた。

その日、いつもなら遅くても6時半には帰っている夫が帰ってこない。はて、おかしい、と何度か時計を見たころ、電話が鳴った。交通事故を起こしてしまって車がないから、迎えに来てくれという。

間の悪いことに、ちょうどわたしの車は修理に出していて家に車がなかった。イタリアで代車が出ないのは普通である。誰に頼もう、と知人友人の顔をあれこれ思い浮かべ、よし、インドネシア人のラニー、と決めて電話をかけた。少し前に彼女のお母さんがインドネシアから来たとき、心臓が悪くて病院に救急でかかるのに通訳かたがたつきあっている。国際クラブを通じた外人どうしの助け合いだ。

ラニーは、わかった、でもちょっと待って、乳母に子どものことを頼んでおくから、と言って電話を切った。この家にはインドネシアから連れてきた住みこみの乳母兼女中がいるのである。

体重40キログラムのラニーが、体重120キログラムの石油関係の会社勤めのアメリカ人と知り合って結婚して、最初の子が生まれた。夜昼問わず赤ん坊は泣く。ときには抱いて歩かない限り、泣き続ける。音（ね）をあげたラニーに、母親は乳母を算段してきて、当時の旦那の赴任地であったクウェートと一緒に連れて行けと言った。あんたにはひとりで子育ては無理よ、と。

だいたいがお嬢様の出である。父親は外務省の事務官で、ラニー自身が子どものころミラノのインターナショナルスクールに通ったと言っていた。第三世界では特権階級のエリートだろう。

が、彼女に言わせると、上には上がいるそうなのよ。

同じ団地に、ということはウチと家の広さは地下室を除けばそんなには違わない、ということだが、父親ほどの歳のイタリア男と結婚した若いフィリピン女性が住んでいる。彼女の家には住みこみの乳母兼女中に加え、運転手までいるのだという。しかも、運転手専用の車まである。

「だからね、彼女は自由なのよ。わたしは行きたいところがあっても、子どもの学校の終わるころには、必ず車で迎えに行くために帰ってなきゃいけない。彼女はね、乳母と運転手を子どものお迎えに行かせて、自分はずっと遊んでいられるの！」

さて、ラニーの運転で夫を拾いに行ってみると、夫は溶けかかったアイスクリームをスーパーの袋にぶら下げて待っていた。いつもの帰り道が事故か工事かえらく混んでいたのだから、車を煮やして違う道から帰ろう、とUターンをしかけたところ、後ろから中央線を越して疾走してきたバイクをひっかけてしまったのだった。

まわりのイタリア人が警察と救急車を呼び、おまえは車を動かしてはいけない、と言うから、車を道の真ん中に置いて渋滞をさらにひどくし、気のいいイタリア人が自発的に交通整理をしてくれるので夫がそのまま待っていると、警察が来た。夫は迂闊（うかつ）にも知らなかったのだが、そこは追い越し禁止区間でUターンも禁止だった。中央線を越したバイクもよくはないのだが、夫のほうがもっと分（ぶ）が悪い。

ここまでなら罰金だけですんでいた。が、イタリア人は警官といえど話し好きである。ふだん夫のおしゃべりの度合いは、特に初対面の人とではわたしよりはるかに低いのだが、このときは興奮していたせいか少しおしゃべりをした。

「いやいや、イタリアに来て4年経つのに、交通事故は初めてだよ、まいったな。女房は何度もやったけど」

この無邪気な一言で、彼は墓穴を掘ってしまったのであった。

「なに、おまえはイタリアに来て何年も経つのに、まだイタリアの免許を取

っていなかったのか」

イタリアの法律では、他国の国外免許（国際免許）でイタリアを運転しているのは滞在開始 1 年以内に限られる。2 年目からはどうするのか。イタリア人同様にイタリア語で試験を受けてイタリア免許を取るか、二国間協定がある場合のみ、それに基づいて他国の免許とイタリアの免許を交換するかの、どちらかである。EU 加盟国については、自国の免許で EU 内はみな運転できる。

来てしばらくは、わたしたちはそんなことは知らなかった。ふだん日本人とマメにつきあっていないと、不便なこともあるのだ。やがて、日本と結ばれていた二国間協定が何かのトラブルで一時停止になり、最近になってまた有効になった、と聞いたような記憶はあった。

近所の、多少のつきあいのある日本人に尋ねると、うん、ウチはね、日本の免許をイタリアの免許と交換しました、と言う。「だけどそれだと日本にちょっと帰ったときに免許がなくて不便でしょう。だから警察行って、なくしました、って嘘ついて、再発行してもらうんです」

なるほど。

が、面倒だった。イタリアで行くべき場所が今ひとつよくわからなかったし、2 万円以上のお金もかかると聞いた。行ったはいいが、窓口がどこかわからない、やっとたどり着いたら、これこれの書類が足りないから出直してこい、でも昼からは開いてないからね、はい今日は時間切れ、というのも充分考えられたので、勝手のわかった日本に帰るたびに、1 年有効な国外免許をとるほうがよほど簡単だったのだ。

もっともその国外免許でさえ、イタリアで万事 OK とはいかなかった。来て間がないころ、ミラノの一方通行だらけの街中を四苦八苦しながらわたしは車を走らせていた。気がつくと、交差点で左折したくて中央線沿いに止まったのに、行く先には左折禁止の標識がある。おまけに対面しているバスの運転手は親切に手を振って先に行けと合図する。ええい、ままよ、と左折したら婦人警官が待っていた。

日本の国外免許を見せると、パラパラとめくって見た彼女、「イタリア語で書

いてないわね。わたしに読めないから、ここでは無効よ」

確かに、アメリカの国際免許は 11 カ国語で書いてあったが、日本のは英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語の 6 カ国語だけで、地球レベルでは読めない人が多かろう。

が、憤慨したわたしはイタリア語で力説した。

「なにを言うか。わたしは合法的にここに来た日本人で、これは日本国政府がわたしに出した、立派な、合法的な運転免許である。わたしがここで運転するのは正当な行為だ」

が、当時わたしのイタリア語は下手だった。わたしがまちがえるたび、彼女は眉をしかめた。英語とイタリア語はかなり近い。英語をローマ字風に読めばいいのがいくつかあるので、わたしがまちがえて政府をゴベルノメントと言ったとたん、彼女は諦めた。

「もう行っていいわよ」

一瞬訳がわからなかったが、どうも彼女は、イタリア語がろくに話せない外国人を相手にする根気がなかったらしい。罰金を払わないですんだ、と理解した瞬間、わたしはバックミラーを見てアクセルを踏み、尻に帆掛けて逃げ去った。イタリア語で政府はゴベルノという。

イタリアで警官に捕まったら、「一言もイタリア語を話すな、イタリア語がわかるふりもするな。自国語でまくしたてろ。そうすればイタリアの警官はたいい諦めて無罪放免になる」とは、外国人の常識である。

日本の警官はどうなんだろう？

さて、夫は許可期間を過ぎていながら国外免許証で運転し（つまり無免許になるのかな？）、事故を起こしたかどで罰金をくらい、さらに国外免許証と、日本の免許証と、ご丁寧に車まで没収された。日本では考えられない処罰であるが、ここで車の没収はかなりフツーにやられる。没収期間は 2 カ月。

わたしとは違い常識人でごねない夫は、おったまげたが、すなおに従った。翌日から、車で 20 分かかる会社へ自転車をこいで行くという。4、50 分は優に

かかるだろう。

「バカなこと言いんさい、わたしが送ってっただげる。あ、でも、あしたはいいけど、あさってはわたし朝から車が要る」

「だろ。いいよ。自転車があるから行くよ」

高緯度のミラノの6月は暮れるのが遅い。午後10時まで明るい。会社の終わる午後5時はまだ、カンカン照りとまではいかななくても充分暑い。

夫はみるみる痩せた。中年太りでここ何年かズボンの買い替えやウエスト直しが頻繁（ひんぱん）だったのが、あつという間に腹のでっぱりが平らになった。が、さすがに帰ってくるとシャワーを浴びて長々とひっくりかえっている。

イタリアはそれでいい。2カ月待てば。

問題は日本である。

この夏、夫は珍しく1カ月間東京で仕事をするようになっていた。車がなければ駅まで足がない。田舎住まいなので車は必需品。日本の国内免許証だけは必要だった。

「だいたいさ、国外免許証だけ没収すればいいのに、なんでまた日本の免許まで取り上げたんだらうね？」

「俺にもわからん。見せろというから見せたら取り上げられた」

「見せなきゃよかったのに」

「もう遅いよ。まさか取り上げられるとは思わなかった。返してくれるかな？」

「ふん、わたしが強気で押して、言いまくってやる。何がなんでも、絶対取り戻す」

「頼むよ。しゃべるならあんただ」

「まかしとき」

ミラノ市街の指定された警察の窓口に出頭すると、イタリア人には珍しく、あまりぱりっとしていないポロシャツを着て、頭の薄くなりかけた冴えない中年男が、「日本の免許証は返せない」とぼそぼそと言う。「それは困る。返せ」

と鼻息荒くわたしが言うと、「ではフンツィオナーリオへ行くか？」と聞かれた。

フンツィオナーリオなるものが何のことやらさっぱりわからなかったが、憤然として「行く」と答えると、ちょっとそこで待っているとされた。しばらくすると、何人かで中庭を歩いて移動することとなった。

隣のおしゃれなイタリア中年女性に、「あなたもフンツィオナーリオへ行くのか」と尋ねるとなずく。「ちょっと悪いが、フンツィオナーリオというのは人なのか場所なのか教えてくれ」と頼むと、彼女は珍しげに数秒間またたきもせずわたしを眺め、そして、唇の片端で薄く笑って一言、「人よ」と言った。わたしが無知で無謀なのにえらくあきれたらしい。あとで辞書をひくと、フンツィオナーリオは上級官吏の意味だった。

フンツィオナーリオは受付のしょぼくれ男とは対照的な、しゃきしゃきとしやべる、絵に描いたような官僚風の男だった。ぱりっとした背広に白いワイシャツ、気のきいた色のネクタイ、銀縁のめがね。髪は短く、若い。わりにいい男。

が、傲慢だった。

国外免許も、日本国内免許も、返せない、と言う。

「どうして？ だいたい日本政府の発行した日本国内用の免許を、なんでイタリア警察が没収するのよ。いったいそんな権利あるの？」

彼は、国外免許は国内免許に付随して発行されたものだから、という説明をし、また日本政府の出したものであるから、イタリア警察はこの免許証を日本領事館に返還する、わたしたちには日本領事館から受け取ってくれ、と言った。

「いつ？」

「今から日本領事館へ送るから、連絡があったら日本領事館へ行ってくれ」

「それは困る。わたしたちはあした日本に帰るのよ」

「何？ ほんとうか」

「ほんとうよ。あしたの飛行機のチケットがもう買ってある」

「ではそれを見せなさい」

「ここにはない。家にある」

「では取りに帰りなさい。とはいってもこの事務所はあと 30 分で閉まる。時間がないならファックスでチケットのコピーを送りなさい。それを見せて、あした帰国するということが証明できなければ、免許は絶対返すわけにはいかない」

思いがけない展開に目を白黒させているうちに、わたしたちは廊下につつき出された。「官僚」はすでに次の人と話をしている。

ファックス。チケット。

家にファックスはない。あるのは、家から車で 5 分の文房具店。が、14 歳の息子に、行ったことのないわかりにくい場所を電話で確実に理解させられるだろうか？ 日本とは違い、スクールバスで遠くの学校へ通い、近所にはごく限られた友だちしかいない状況では、彼の頭の中の地図はえらく狭い。チケットを手に道をうろうろ走っているあいだに、まずまちがいなく正午、カーン、タイムアウト、だろう。

どうすべきか夫と言い争いをしながら、わたしはアルゼンチン人のサラに助っ人を頼むことに決めた。サラはなんと、6 人の子持ち。受胎制限をしない敬虔（けいけん）なカトリックだと本人は笑う。姓がまたカサノヴァ。歌劇では色男で名高く、百人切りをしたとかしないとかの手合いと同じ名である。子だくさんになるわけだ。その 6 人の子のうち、2 人がウチの子と同じ学校で同年なので、ガハハという性格も含め、サラはわたしとわりにウマが合った。

わたしは珍しく持っていた携帯電話でサラに、すまないがウチに行って息子の差し出す飛行機のチケットを、ここの番号にファックスで送ってくれないかと頼んだ。ついで息子呼び出し、なんで俺がこんなことを、と文句をたれるのを非常事態だと怒鳴りつけ、飛行機のチケット 6 枚を入れた引き出しを探させる。

時計を見ながらじりじりバタバタしていると、「官僚」がわたしたちをさんづけもせず大声で呼びつける。今さら何だ、と部屋に入ってみると、ほらこれ、と夫の日本の免許証を手を持っている。「今からこの事務官に日本領事館まで持って行かせるから、領事館であなたの免許証を受け取りなさい。領事館に

は連絡をしておく」。そばに受付のしょぼくれ男が立っている。

飛行機のチケットうんぬんの話はいったいどこへ消えたのだ？

狐につままれたような気分だったが、この機会を逃してはならないことだけは、夫もわたしも即座に理解した。

言われるまま下で待っていると、しょぼくれ男が足音高く階段を下りてきて風のように部屋に入っていきながら、事務室の扉をものすごい音をたてて閉めた。彼はわたしたちにか、上役にか、それとも何か他のことにか、猛烈に腹を立てていたのである。

しばらくして、彼はわたしたちに封筒を渡した。自分で日本の領事館に持って行けと言う。わたしは夫と顔を見合わせた。

ま、手間を省いて、要するに返してくれるってということね。

とはいえ、順法精神にとんだ日本人夫婦はその場で封筒を開けるにしのびず、ふたりで首をかしげつつ、「あれは何だったんだろうねえ？」「言うべきことだけ一度言ったらあとはできなくても気にしないんだよ。で、お昼は絶対ちゃんと食べたいんだよね」「勤務時間外に働く気ないもんねえ」などと話しながら、てくてく蒸し暑い石畳の道をご丁寧に日本領事館まで歩いて行ったのであった。

領事館員はもちろん、イタリア警察から何も聞いていない。目をぱちくりとした事務官にわたしたちはざっと事情を説明しながらともかく封筒を渡し、一言説教をくらい、封筒の中身を返してもらった。

イタリア人というのは、本音と建前の使い分けが見事というのか、割り切りが早いいかげんな怠け者というのか、不思議な民族である。

今回の一時帰国のあいだには、子ども4人を日本の小、中学校に夏休みまで20日足らず通わせる、というふだんの仕事のほかに、やらねばいけない大切なことが2つあった。半年後の年末にわたしたちは本帰国する可能性が高く、そうすると帰国するや否や日本で中3にあたる長男は高校受験である。どこなら受験できるか、適当か、願書は、必要書類は、といった情報を、日本にいるあいだにできる限り集めておかねばならなかった。インターネットという便利な

ものがあるとはいえ、細かなことや電話となると国内がいい。もうひとつは慢性の頭痛に悩んでいた中1の長女に、学校が休みのあいだに日本でもう一度医者にかかり検査を受けさせることだった。

いつもであれば忙しさに備えて「一発気合を入れて」帰るのだが、抗がん剤の治療と手術を終えて3カ月も経っていない。わたしの体力はどうしようもなく落ちていて、気合の入れようがなかった。いつも以上に忙しいとわかっているでも。

しかし現在のわたしの本職は「母」である。記入して提出せよと学校から渡される書類には、わたしの職業を「主婦」ではなく「母親」と書きたいとも思うくらいだ。

それを見透かすかのように、8歳の次女がイタリアを離れる当日、「ちゃんと」9度6分の熱を出した。旅行の際の子どもの発熱、というのはもうわが家にとってあたりまえ。強行突破しかない。熱さましをのませ、わたしは飛行場の中をずっと娘をおぶって歩いた。化学療法の後遺症だろう、夏というのに膝が痛い。

ほかの後遺症には、右腕を一番上まで上げると、なんとなく二の腕の内側からわき腹にかけて皮膚がつるような感覚があった。特に、急に腕を上げると違和感がある。洋服などがこすれた時に、皮膚が大根のおろし金ですられたように痛むのも、まだ変わりはない。

切られたほうの腕で重いものを持つな、というのがイタリアでの乳がん全摘、リンパ節切除後の常識だった。7キロまで、と何人かから聞いた。が、飲料水をでかいペットボトル6本セットで買うのがあたりまえのイタリアでは、主婦は重たいものを持たざるをえない。家の外で働いていれば、仕事によってはなおさらである。

頻繁に重いものを持つとどうなるか。腕がむくむ。ひどい場合、反対側の健康な腕の2倍ほどに、指の先まで膨（ふく）れ上がった人をふたり見ている。リンパ節を取られてしまったのでリンパ液の循環がうまくいかず、腕にたまっ

た液が胴体に帰らなくなって、むくむのだ。たちの悪いことに、日本の鍼（はり）が効くらしい、と聞いたほかは治らないと言う。一生ものである。

わたしの場合、重いものは夫が極力持ってくれた。体力がないので、いろんなことはしなくてあたりまえ、と日常生活の水準を下げているので腕がむくんだことはまだない。そのかわり、腕を使ったり振り上げたりしたあと、わきの下の、ブラの横のベルト状の上の部分が、多少むくむことがある。中年になったせいかな、と疑うが、右左を比べるとやはり手術したほうだけなので、やはり手術のせいだろう。

一番の変化は体重かもしれない。前期のきつい化学療法のあいだ、4 カ月で6 キロ痩せた。パンツがずり下がり、からだの丸みがなくなってこれは痩せ過ぎ、みっともない、というところまでいってから、後期のゆるい化学療法に入ったとたん、月に1 キロの割で太りだした。6 キロ増えて元に戻ってもまだ止まらない。だいたい成人してから、わたしの体重は63 キロの高値安定、引越しを機に決心して3 カ月で8 キロ痩せたことが3 回あるが、その後4 年以上続いたことはない。じわじわ戻る。が、63 キロではあまり見た目がぱっとしない。161、2 センチという身長では、ま、55 から58 キロくらいまでが、わたしとして「着映えがする」限度である。これ以上太っては、イタリアで買いまくった服も入らなくなる。11 月を最後に化学療法で生理が止まっていたが、病院では、更年期に入ったせいもあって痩せにくいのかもね、と言われていた。

閉経したのは、化学療法が女性ホルモンにかかわるものだからあたりまえといえそうだったし、毎月のわずらわしさから解放されたのも物理的にすごく楽だったが、心の準備はできていなかった。説明を受けた覚えもない。更年期の早い人は40 歳くらいから、と聞くが50 歳過ぎてからの人も多い。毎月の訪れが順調であった42 歳のわたしは、いずれは閉経するだろうが、そんなものはまだまだ遠い先だと思っていた。妊娠の可能性がなくなる、というのは安心だとも言えるが、なんというか、女として現役ではなくなるような感じも含まれる。さみしい。「ちょ、ちょっと待って」と言いたかった。でも、言えない。もともと自分で選べることもないが、この際生命の確保のほうが先である。

しいて早期閉経のメリットを探せば、浮気しても絶対に妊娠しないことだろうか。ま、幸か不幸か、後にも先にもわたしにその機会はなかったが。

成田空港からは、いつものようにレンタカーの大きいのを2時間運転して自宅まで帰る。へんぴなところに住んでいるのと大人数なので、それが一番安い。時差ボケだろうがなんだろうが、一時帰国はえらく物入りなので、金のかかるタクシーはありえない。腕まくりして慎重に運転する。昨日まで道の右側を走っていたのが今日は左側、ハンドルの位置もウインカーの位置も逆。帰国して1週間ほどは必ず、方向指示器の代わりにワイパーを動かすし、人気のない交差点では反対車線に入る。こっちはちょっと舌を出して「あ、またやった」てなものだが、対向車の運転手は両目を思い切り見開いて口を大きく開け、運悪くわたしの隣の助手席に知人が乗っていた日には、寿命が3日縮んだとわめかれる。

茨城県の自宅は、ありがたいことに遠くの山口県からわざわざ夫の父母が来てくれ、1年分の庭の草を刈り、植えこみの枝を切り、家中を掃除してくれていた。外国暮らしのあいだ、自宅は家具を預けてでも貸す人が多い。ローンの助けになる。しかし、わが家では2年分ほどのローンの額を銀行に残し、空き家のままにしておいた。一時帰国のあいだ住むところを確保しておこうという夫の主張に同意したのである。貸してしまえば一時帰国の際、通っていた子どもたちの小学校からは遥（はる）かに離れた、実家か親戚宅で肩身の狭い思いをするか、狭くて不便なホテル暮らしかになる。6人暮らしのわが家には、どちらも容易ではない。4人の学資保険も2年分払っておいたので、貯金はきれいに底をついた。

ローンと学資保険の残りは、これもありがたいことに義父が「わしが払うちやる」と申し出てくれた。この義父母はホントにわたしたちによくしてくれ、孫たちも目に入れても痛くない、というほど可愛いがっていた。いつぞやミラノに義父から国際郵便が来たときなど、息子であるわが夫に向かって「おまえは『わしのだいじな孫たちの保護者』であるから、からだによく気をつけろ」

とまで書いてあって、夫は慫慂（ぶぜん）としていた。この言い方はないよね。

さて、翌日は朝の4時から真っ青な空に、これ以上はない、というほど太陽が輝くカンカン照りとなった。降るほどの蝉の声が余計暑さを感じさせる。熱が下がった次女を次男とともに3キロ離れた小学校へ歩いて行かせたとたん、保健室から電話がかかった。40度の熱だという。「えっ」と言ったきり絶句したわたしは、車を出して娘を学校から医者連れて行き、肺炎だとの診断にもう一度「えっ」と言い、さらに入院しろと言われて三度目の「えっ」を発した。医者は重ねて、日本でこの時期の肺炎ならマイコプラズマ型だと見当がつくが、ミラノから菌を持って帰ったとなると、どの抗生物質が効くかわからないね、と脅かしてくれる。

小児科の名医がいると聞いていた別の病院に、入院のためそのまま回ると、人手不足の折からか小児科は付き添いが必要だという。体力のないわたしはそれを幸い、看護師が去ると同時に、個室の娘のベッドの隣の長いすに倒れこむように眠った。

しかし、実は寝ている暇はないほど忙しい。

日本の田舎の公立小中学校は、たとえ学籍簿に名前ののらない2週間の体験入学であろうと、制服、自転車、雨ガッパ、体操服から体育館履き、上履き、絵の具、習字道具、給食の手拭き、連絡帳、三角定規に至るまで、ほかの子どもたちと同じものを要求する。たぶん、ふつうの国内の転校生と同じ感覚なんだろうと思う。経験の少ないことは、誰だってわからない。が、親が4人分、それをそろえるためには、最初の1週間は時差ボケの中で買い物と借り物に走り回り続けなければならない。娘の夕食が終わるとわたしは家に帰り、買い物に走った。義母が用意してくれた夕食を食べ、シャワーを浴びてから、病院に戻り長いすで眠ると、夜明けとともに近所の農家のにわとりが延々と鳴き続けるのには閉口した。

帰宅し、受け入れ態勢の遅れた中学校に上の2人を連れて行くと、見かねた夫の母が付き添いを代わってくれるという。ありがたかった。義母がいてくれ

なければどうにもならなかった。義父は予定通り3日ほどで帰ったのだが、義母は切符を代えて残ってくれたのである。とはいえ車は1台、義母の送り迎えはわたしである。

いつぶっ倒れるか、と思うような日々で、娘の入院が2日で終わったのにはほっとした。ミラノから持って帰った菌もマイコプラズマ型で、抗生物質がよく効いて半日も経たないうちに熱は下がり始めたのだ。

つけはちゃんと来た。終業式が終わり、今度は頭痛持ちの上の娘を同じ小児科医に連れて行くと、自律神経の検査をしようと言われた。炎天下、別の病院に予約をとりに行った日、わたしは朝から8度の熱を出していた。翌日が検査である。訪れた病院でわたしは意を決して、横になるところを確保できないかと頼んだ。ずうずうしい話である。しかし一時帰国の限られたあいだに検査と診断をすませるには、日にちを替えてもらう訳にはいかなかった。待合の長いすでもよかったのだが、病院側は親切に1室を用意してくれ、娘の検査のあいだわたしは眠った。

娘の頭痛が始まったのは1年半ほど前からで、可哀そうに毎日痛いと言う。ときには学校を休みたいと訴えることもあったのだが、日本の親として、顔を洗って朝ごはんを食べたら治る、学校に行けばよくなる、と叩き出すようにして、実際に休ませたのは3カ月に一度ほどだろう。あとから思うと悪いことをした。

1年前の夏休みに、日本の大きな病院でMRIだのなんだの脳ミソの検査はひとつとおりしてある。イタリアでしてもよかったのだが、どの病院がいいかわからないし、学校を休ませるのもいやだった。腫瘍などの怖い病気はない、とのことではまず安心したが、では何が原因か、となると、誰にもわからない。欧米では偏頭痛が日本より多く、思春期の頭痛がこれまた多い。ミラノインターナショナルスクールで中学校の教頭さんにぼやいていると、

「ウチの娘もそうだよ。思春期のアンバランスだろう」と言われた。

「どういうこと？」

「成長期に身体がどこもかしこも同じように変化成長すればいいけど、ホ

ルモンだの自律神経だの筋肉だの骨だのが、こっちは成長が早い、あっちは遅い、となると、バランスが崩れるんじゃないか。それで頭痛が起こるんだ。成長が止まれば治るよ」

この説は何人かから聞いた。

「ずーっと痛がってたんだけど、それが成長が止まったら、ほんとにウチの子は治ったわね。今はケロツとしてる」

イタリアの小児科医に言わせると、確かではないのよ、ほかに理由が見つからないし、成長期が終わると頭痛もなくなるものだから、そう言ってるだけ、となる。

「痛み止めをのみなさい」

これが効くのがひとつもなかった。日本のも、イタリアのも、片っ端から試し、イタリアのイブプロフェンなど、日本の大人の量の2倍まで試せと薬剤師が説明書を見せて言うから、わたしはそのことばを信じて娘にのませてみたが効かなかった。これにはまいった。毎日頭が痛くては快適でいられるはずがなく、娘は可哀そうだし、親としては無力感を感じる。これが1年後、本帰国したあとでさらに悪化し、不登校となっていよいよ頭を抱えることになるとは、このときは知る由（よし）もなかった。

さて、検査の結果、娘は自律神経の調子が悪いのだと言われた。人間起きているときと寝ているときとでは、違う種類の神経が活発なのだそうだ。そういえば昔、高校の生物の授業でそんなことを習ったような気もする。娘の場合、眠っているあいだに活発であるはずの副交感神経が目覚めてからも引き続き活発で、目覚めているあいだに活発なはずの交感神経が低調である、と検査の結果の折れ線グラフのようなものを見せて医者が解説する。起立性調節障害、という病名がついた。起きた時に調節されるべきところに障害がある、ということか。

体質改善のための日に三度の漢方薬と、痛み止めが処方された。近所のひとに頼んで、もうひと月分はあとで送ってもらうことにする。

次は高校受験を控えた中3の長男。部活をさぼり、ここぞとばかりに遊びほうけている。さらに反抗期まっただなか、よくあることとはいえ、ちょっと許しがたい悪さが家の中で発覚した。私の財布から何度か万札を抜いて使っていたのである。

わたしは大学時代体育会にいて、落ちこぼれ気味ながら合気道の黒帯をとっている。そのうえ、気性としてやることなすことが過激に走る傾向がある。息子を板の間に30分正座させて殴ったり蹴ったりしながら、頭にきて縄で縛って裏の物置にぶち込もうかと言ったら、夫がこの暑いのに殺すなというからやめた。今なら虐待ものである。

それでも、育て方をまちがえたかとわたしは2、3日眠れぬ夜が続き、「あれだけ痛い思いをさせても、喉もと過ぎれば忘れておしまいではないか。ここでよくよく懲（こ）りさせなければ」と考えこんで、強制労働、という手を思いついた。使った金額にふさわしいと思われる50時間分、家で働かせて弁償させるのである。生垣の刈りこみ、庭の草とり、床のワックスがけ、皿洗い、洗濯物干し、トイレ掃除、風呂壁のかび取り……。結局半年がかりで終わらせることとなり、わたしにもよくよく根気が要った。

が、要領のよい息子は「これが終わんなけれりゃ遊びに行けねえんだよ」と、誘いに来た友だちに手伝わせる始末で、わたしが外から帰ってみると近所の子がウチの生け垣をケチョンケチョンに短く刈っていた。

なんのこっちゃない。

勉強はどうか。直前にイタリアで、これまで見たことがないほど悪い通知表をもらってきて、わたしはすうーっと顔が青ざめたが、日本でも息子には受験生という自覚は毛筋ほどもなく、実力テストがあっても習ってないからと先生に言って受けなかった。そうすると、どの程度の高校になら入れそうか、という目安が何にもない。何ひとつ、である。ゼロ。

この田舎の中学校はいいところだが、南米からの移民の子はいても帰国子女は前代未聞で、お世話になるからと重たい缶ジュースを40本も病後の身で担（かつ）いで行って、先生方にひざ詰めで問うてみたが、前例がないし、ろく

に教えてもいない子では見当がつかない、とまるで相談相手にはならなかった。無理はない。先生方も困ったんだろうと思う。

親のわたしがひとりでどうにかするしかないのだ。

バーベキュー・パーティで愚痴っていると、夫の元同僚の奥さんが、塾を活用したら、と提案してくれた。学校は忙しいが、塾は金さえ出せばいろいろしてくれる、と言うのである。

なるほど、とわたしは電話帳でやや都会の隣町の塾を探し、話をして、実力テストを夏休み中に一度、あとはイタリアに帰ってからも月に一度の割でファックスで送ってもらい、回答を送り返して採点、という手はずをつけ、前金で払った。

次は高校の情報収集である。ここ茨城はわたしの故郷でなく、イタリアに来る前にも5年ほどしか住んでないので、基礎知識がない。私立2校と公立1校、そして県の教育委員会に電話をかけ、それぞれ1時間ほどじっくり話を聞いた。別の私立1校には行って、あれこれ聞いた。このあたりの私立には帰国子女枠がなく、公立で枠があるのは地域で一番の進学校だけで、それも「ついていけそうな子しかとりません」と明言する。受験科目が英数国の3科目しかないとは言っても、それを5科目分に計算しなおして他の子と同じように比べるので、国語と数学の劣るのは補いようがない。

能力はあるのだが、外国語で教育を受けていたから、現在において日本でのテストの点がよくない、という子も受け入れよう、そのうち日本のやり方に慣れれば点も上がるだろう、という姿勢がまったくない。ただひとつの日本の枠に、外国育ちだろうがなんだろうがはまらなければ、それでおしまい。

なんという閉鎖的で、柔軟性のない社会であろう。英語のテストでさえ、この子たちは日本語で英語を習ったことがないから、「catのaと同じ発音が含まれる語を下の語から選びなさい」みたいな問題の意味が理解できないことがある。ましてや日本語に訳す練習なんぞはしたことがない。たとえ意味はわかっても、日本語がきっちり書けないと点はとれない。受験技術に欠ける。

数学は同じだろうと思われがちだが、大学レベルはともかく、小、中学校で

の日本の数学は世界一とっていいほどひねった難しい問題を解かせる。息子はイタリアの通知表では数学がAだった。褒められ、自分でも自信を持っていた。それが日本に帰ると解けない問題ばかりで、文章題はそのうえひっかかる。国語はいうまでもなく苦手で、漢字はろくに書けない。

ここへ来て、わたしはなぜ海外の日本人学校が繁盛するのかやっと理解した。義務教育である小、中学校はともかく、日本で一番閉鎖的なのは高校である。受験が厳しいだけでなく、編入試験が受けられない、受けられても2年生まで、というところがほとんどだった。

やむを得ず、夫の海外赴任が終わっても、上の子どもが海外の高校を卒業し、日本の大学を帰国子女枠で受験するまで母と子だけ外地に残った、という例をミラノで日本人から聞いている。逆単身赴任。会社の補助は住宅にも学校にもつかなくなるから、「1年半で家が1軒建つくらいお金使ったわよ！」と彼女は笑っていた。

ならばと、高校入学の時点で親は海外にいても子どもだけ帰国させ、祖父母宅か寮に入れる家庭もある。しかしウチの息子の素行（そこう）を考えると、とても親の手から離すわけにはいかなかった。寮の居心地がいいとも限らず、「脱走したって連絡が来てね、親があわてて探しに帰国したって人いたわよ」とは別の事例である。

ともあれ、息子がどうにか入れる、かもしれないのは、私立1校だけだった。「お待ちしています」ということばが救いだっただ。それにここは不良が少ないさわやかな感じと評判で、偏差値が低めで入れるかもしれないが不良っぽい服装が眼につく公立校よりは、わが肝焼き息子にとって遥（はる）かに大切な必要条件を満たしていた。

茨城での1カ月が終わり、これも例年どおり山口県の夫の実家に家族6人で帰る。

新幹線から在来線に乗り換えると、めいめいが着替えの入ったリュックを背負った子どもたちに、向かい合わせの座席に座ったばあ様が、あんたらどこか

ら来たんかね、と問うた。「茨城からじゃが、ほんとはイタリアから」と次男が答えると、ばあ様は眼を見開き、「この子頭がおかしいんじゃないだろうか」という顔で母親のわたしを見つめた。わたしがニッコリ笑って「ええ、そうなんですよ」と答えると、ばあ様はまだ半信半疑の態（てい）で、そしたら何かイタリア語の歌を歌うて聞かせちゃくれんかの、と頼んだ。

下の2人の子が愛嬌（あいきょう）好（よ）く、「フラッターリ、ディータリア、リータリア、セーデスタ」とイタリア国歌を歌いだすと、聞いたこともないメロディとことばにばあ様は口をあぐりと開け、これならばイタリアに住んでいるというのは嘘ではないらしいと何度もうなずいて納得し、さらに感激し、財布をさぐって、「ようまああんたら遠いところを帰ってきた、これでジュースでも買いんさい」と4人の子に大枚2千円をくれたのであった。

わたしは子どもたちがこれから先、大道芸人で食っていけることを確信した。

夫の実家は瀬戸内海の近くで魚がうまい。わたしは海で泳ぐのが大好きなのだが、手術前の去年に引き続き、病後とあって、義父母は今回も「まどかさん、泳ぎどもせんことよ（泳ぐなんてとんでもないことは絶対してはいけないよ）」と釘をさす。言わなければ当然の如（ごと）くわたしが泳ぐのは、夫の親もよくわかっている。

そして母が亡くなったあと父だけが暮らしているわたしの実家に顔を出す。男独（ひと）り、さびしいようだがなんとか暮らしている。山口市名物の、雅びて華やかながら、どこか哀れを感じさせるちょうちん祭を楽しみ、母の初盆をすませる。わたしたちが帰って来られない一周忌も同時である。姉の一家も来て、子どもがあわせて7人。とつてもにぎやか。

わたしは坊様のお経が終わったら11人分の茶を出さねば、ということばかり考えていたら、読経の途中で別の部屋の戸がそうっと開いたのに仰天した。うちの三番目が座っていないのにそれまで気がついていなかったのだ。4人の子がいると、2年に一度くらい子の1人が欠けているのに暫（しばら）くのあいだ気づかないことがある。

親戚のところへ顔を出したり、日本の乾物や本を山ほど買いこんだり、あっという間にひと月は過ぎる。

飛行機に乗れば待っているのはミラノ最後の秋……。